

Title	17世紀初頭カイロのハワージャー： 『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書
Sub Title	Khawājā merchants in Cairo in the early 17th century
Author	長谷部, 史彦(Hasebe, Fumihiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020. ), p.275- 300
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0275">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0275</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 17世紀初頭カイロのハワージャー

——『マバーヒジュ』とその続篇に基づく覚書——

長谷部 史 彦

はじめに

アラビア語のハワージャー (khawājā) は、テュルク諸語のホジャ (ホージャ)、ペルシア語のハージェに相当し、「紳士」や「貴顕」に対する敬称である。オスマン朝期 (1517-1798) のエジプトにおいて、この語は、スーフイーの導師、ウラマーの学師などの宗教指導者ではなく、遠隔地交易に従事する富裕な大商人を指して用いられたので、「紳商」、「富商」、「豪商」などの訳語を当てることができる。

中世イスラーム世界の砂糖に関する研究において佐藤次高は、ハワージャーの称号がマムルーク朝領外を舞台に奴隷などの交易に携わる国際商人のみならず、首都カイロのカーリミー商人にも用いられていたことを確認し、当該期にハワージャーが外来商人に限られた称号ではなかったことを明示した<sup>(1)</sup>。「ハワージャー」は現代エジプトの口語アラビア語で「ハワーガ」に当たり、観光客などの外国人、特に欧米人に対し使われることの多い語であるが、マムルーク朝期と同様にオスマン朝期において、エジプト出身の紳商に対しても「ハワージャー」の尊称は用いられていた。他方、カイロを拠点に国際交易で活躍したハワージャーのアブー・ターキーヤに的を絞り、オスマン朝エジプト州の商人に関する研究を前進させた N・ハ

(1) Tsugitaka Sato, *Sugar in the Social Life of Medieval Islam*, Leiden: Brill, 2014, p. 85.

ンナーは、「ハワージャー」を商人の称号、「ハワージャキー (khawājakī)」を大規模な長距離交易に従事する商人の称号と区別しているが<sup>(2)</sup>、論拠が不明で釈然としない。また、A・レイモンはその初期の論文でハワージャーをヒジャーズ・エジプト間でコーヒーや香辛料の交易に従事する大商人と解説しているが<sup>(3)</sup>、その後の諸研究が示すようにハワージャーにはその他の諸品目を商う者たちもいた。

いずれにせよ、オスマン朝期のエジプト社会で如何なる商人がハワージャーと呼ばれ、如何なる場合にハワージャーでなく単にタージル（遠隔地商人、卸売商）と呼ばれたのかは不分明である。現段階では数多くのハワージャーとタージルに関する史料の具体的情報を集め、個々の史実態を可能な限り把握し、比較検討を重ねることが必要である。18世紀の大商人イブン・アブドゥッサラーム（1791歿）に関する論考を始めたA・レイモンの研究<sup>(4)</sup>、前掲のハンナーの著作、フサーム・アブドゥルムウテイーによるエジプト州のマグリブ商人名家に関する研究<sup>(5)</sup>、ムハンマド・アリー期の有力商人ムハンマド・マフルキーに焦点を当てたP・ガザレの論文<sup>(6)</sup>などがその指針となる。それらはいずれも、カイロやその他の

(2) Nelly Hanna, *Making Big Money in 1600: The Life and Times of Isma'īl Abu Taqīyya, Egyptian Merchant*, New York: Syracuse University Press, 1998, pp. 18-19, 192.

(3) André Raymond, “Aḥmad ibn ‘Abd al Salām: Un Šāh bandar des tuggār au Caire à la fin du XVIIIe siècle”, *Annales Islamologiques*, 7 (1967), p. 92.

(4) Raymond, “Aḥmad ibn ‘Abd al Salām”; Id., *Artisans et commerçants au Caire au XVIIIe siècle*, 2 tomes, Damascus: Institut français de Damas, 1973-1974, passim など。

(5) Ḥusām Muḥammad ‘Abd al-Mu‘īn, *Al-‘Ā’ila wa al-tharwa: Al-Buyūt al-tijāriyya al-Maghribiyya fī Miṣr al-‘Uthmāniyya*, Cairo: al-Hay’a al-Miṣriyya al-‘Āmma li-al-Kitāb, 2008, passim; Id., “The Fez Merchants in Eighteenth Century”, in Nelly Hanna and Raouf Abbas (ed.), *Society and Economy in Egypt and the Eastern Mediterranean, 1600-1900*, Cairo: The American University in Cairo Press, 2005, pp. 117-141.

(6) Pascale Ghazaleh, “Governance in Transition: Competing Immigrant Networks in Early Nineteenth-Century Egypt”, in Ulrike Freitag, et al., *The*

主要都市のイスラーム法廷台帳 (sijill) を主な依拠史料としている。

本論文では、16世紀末から17世紀初頭のカイロに関する大部な史書の『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』に素材を求め<sup>(7)</sup>、その死亡記事、事件記事、著者イブン・アジャミーの知己に関する記事にみえる12人のハージャーを取り上げ、個々の記述内容を整理し、考察を加える<sup>(8)</sup>。当該テーマには法廷台帳史料が極めて有用であり、関連記述が断片的な年代記や伝記集などの叙述史料は、これまで補助的に小さな役割を担ってきた。そうしたなか、年代記としての基本性格をもつ本史料は、ハージャー個人に関する記事を少なからず含み、異彩を放つ史書といえる。この大都市で暮らし、商品計量を生業とし、交易・卸売業に関する経験的知識を備えた市場関係者が残したハージャーに関する記述には、人物の個性や評判など文書史料にはみられない諸情報も内包されている。

以下では、①カイロの河港ブーラク、②当該期に非アラブ商人たちの商業拠点として発展したハーン・ハリリー、③カイロ南部のイブン・トゥールーン地区、④それ以外の4つに分け、17世紀初頭の時点でこのオスマン帝国第2の大都市を舞台に活動していたハージャーたちについて、新史料に基づく考察を試みることにしたい。

## 1. ブーラク港のハージャー

ブーラクの都市形成は、マムルーク朝スルターンのナースイル・ムハンマドの第三期治世 (1310-1341) に始まり、紅海・インド洋圏交易のク

---

*City in the Ottoman Empire: Migration and the Making of Urban Modernity*, London: Routledge, 2011, pp. 135-159.

(7) Ibn al-'Ajāmī, *Mabāhij al-ikhwān wa manāhij al-khillān fī ḥawādīth al-duḥūr wa al-azmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A1631. [以下, *Mabāhij al-ikhwān*]; Ibn al-'Ajāmī, *Ta'riḫ al-'Uthmān*, Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A1632. [以下, *Dhayl mabāhij al-ikhwān*]

(8) イブン・アジャミーの経歴や活動、『マバーヒジュ』と『マバーヒジュ続篇』の史料的性格については、拙稿「計量と歴史記述—イブン・アジャミーに関する基礎的考察 (一)」『史学』89巻1号 (2020年)、近刊を参照されたい。

ース・アイザーブ経由ルートの衰退とシナイ半島経由ルートの台頭、それに伴うナイルデルタ経済の活性化などにより、15世紀に入って本格化した。そしてジャクマク期（1438-1453）以降にこの河港の埠頭群や道路網の開発整備が進み、オスマン朝治下に発展が加速した。スレイマン・パシャ（在任1525-1535, 1537-1538）を皮切りに、オスマン朝のエジプト州総督たちがウィカーラ（商館）などの都市施設を続々と新造し、その隆盛は現実になった。こうしてナイル随一の河港となったブーラクは、18世紀末の時点で65のウィカーラ、25のモスク、7つのハンマーム、12の給水所を備えるまでになった<sup>(9)</sup>。

オスマン朝期のこの港町のハワージャーに関する先行研究では、ハンナーがアースイー家に注目しているのみである。同家の商業活動は1570年代まで遡ることができ、アブドゥッラフマーンからその2人の子アブドゥルカウィーとアブドゥルカーディルを経て、アブドゥルカウィーの子のアブドゥッラウフまで、少なくとも3代に亘って商家として栄えた。ハンナーは、同家をオスマン朝期に確認される最初の商人名家の一つとし、その活動はマムルーク朝期のカーリミー商人を偲ばせるとしている<sup>(10)</sup>また、ブーラクには同家の居住地を中心に「アースイー街区 Ḥārat al-‘Āṣī」があ

(9) Nelly Hanna, *Un Urban History of Būlāq in the Mamluk and Ottoman Periods*, Cairo: IFAO, 1983, pp. 2-7, 16-17, 27-29, 35-38, 65-83; Jean-Claude Garcin, “La ‘méditerranéisation’ de l’empire mamlouk sous les sultans bahrides”, *Rivista degli studi orientali*, vol. 48 (1973-1974), pp. 109-116.

(10) Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, p. 39. ハンナーは「アースイー al-‘Āṣī」と表記しているが、『マバーヒジュ』には「アースイー al-‘Āṣī」とある。本稿では後者に表記を統一する。なお、カーリミー商人がオスマン朝期にも残存し、活躍していたことが近年確認され、1540年代から17世紀初頭のアレクサンドリアには「サグル（港）のカーリミー商人の名士中の名士」、「サグルのカーリミー商人のハワージャーの名士中の名士」と呼ばれる商人がいて、名家を成していた。詳しくはフサーム・ムハンマド・アブドゥル・ムウティー（太田（塚田）絵里奈訳）「オスマン朝時代のアレクサンドリア——923～1213／1517～1798年」拙編『ナイル・デルタの環境と文明』Ⅱ、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2013年、124-125頁を参照のこと。

った<sup>(11)</sup>。ハンナーはその正確な所在地点を示していないが、ブーラク北部に位置した同家の2つのウィカーラの位置は確認しており<sup>(12)</sup>、その辺りにあったと推測される。

このようにアースイー家に関する着目はあるが、ブーラクのハージャーに関する研究は未だ初動段階にある。こうしたなか、『マバーヒジュ』とその続篇からは次のような注目すべき事例を掬い上げることができる。

①ハージャー・ムハンマド・ブン・ディップ・アル＝ヒーシュ・ブルッルスィー al-Khawājā Muḥammad ibn Dibb al-Hīsh al-Burullusī (1604年頃歿)

このハージャーについては、エミール・メフメト・パシャ Muḥammad Bāshā al-Sharīf の任期 (1004-1006 / 1596-1598) に発生した「軍隊 (‘askar) の騒乱 (fitna ‘azīma)」に関する『マバーヒジュ』の記事に記述が残されている。この騒乱では、ムハンマド・ダーリー Muḥammad al-Dālī がエジプト州の正規軍の一部に襲われて殺害され、カイロ南部のカナーティル・スイバーウ街区 Khuṭṭ Qanāṭir al-Sibā’ の邸宅が略奪された。ムハンマド・ダーリーはかつて貧しい兵士 (jundī faqīr) であったが、メフメト・パシャに取り立てられて帝室穀倉管理官職 (imānat al-shuwan al-sultāniyya) に抜擢され、その地位を利用し巨富を蓄えた俄分限者であった<sup>(13)</sup>。

被害者のムハンマド・ダーリーに対して批判的な眼差しを向けるイブン・アジャミーは、「彼の非難に値する行状 (sīrat-hu dhamīma)」として、権限を濫用して代金を払わずに、自宅の改築に際して木材・釘などの建材、小麦・大麦・バター油・蜂蜜・砂糖などの食料、籠などの工芸品に用いられるアフリカハネガヤ (ḥalfā’), アレクサンドリアの蜜蠟 (al-sham’ al-

(11) Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, p. 41.

(12) Hanna, *Un Urban History of Būlāq*, pp. 66-67, nos. 9, 21

(13) この騒乱の展開については *Mabāḥij al-ikhwān*, fols. 18v-20v に詳述がある。

Iskandarānī)などを業者や商人から獲得していた常態を暴露している<sup>14)</sup>。そこには次のような記述がある。

彼(ムハンマド・ダーリー)は、ハワージャーのムハンマド・ブン・ディップ・アル=ヒーシュ al-Khawājā Muḥammad ibn Dibb al-Hīshにも同様のことをしていた。というのは、彼(ムハンマド・ブン・ディップ・アル=ヒーシュ)が米(aruzz)や糖蜜(‘asal al-qaṣab)の商売に精励していたからである<sup>15)</sup>。

1590年代の段階で、「茂みの熊(Dibb al-Hīsh)」という風変わりな家名をもつこのハワージャーが、米と糖蜜の商いに従事し、エジプト州総督の手駒であった帝室穀倉管理官と関係を結んでいたことが確認される。

その後、1010年/1601-02年にイブン・ディップ・アル=ヒーシュは捕囚の憂き目にあったが、その理由や展開に関しては『マバーヒジュ』に長い記述がある。その内容を要約すれば、以下のとおりである。

ブーラーク Būlāq al-Qāhira のハワージャーの一人であったイブン・ディップ・アル=ヒーシュは、スパイイー‘Abd al-Barr ibn Muḥammad Subayī al-Burullūsī という人物との間で口論となった。スパイイーはエジプト州総督府へと登城し、州総督アリー・パシャ al-Wazīr ‘Alī Bāshā に対しイブン・ディップ・アル=ヒーシュを中傷する内容の報告をした。彼は自らの権利を主張し、州総督府(dīwān)が商人たち(tujjār)に購入を強制した穀物(ghilāl)の代金の一部がイブン・ディップ・アル=ヒーシュの手元に残されていると上申した<sup>16)</sup>。この購入強制(タルフ)の詳細

(14) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 20v-21r.

(15) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 20v-21r.

(16) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 82v-83r. なお、スパイイーについては職業等に関する記述がないが、彼がイブン・ディップ・アル=ヒーシュと同じくナイルデルタ北部の地中海港ブルルススのニスバ(由来名)を帯びている点は注目に値する。有力な同郷人同士の争いであったのかもしれない。

は不明であるが、州政権の商人たちに対する強制的な穀物販売でこのハーヴェジャーが何らかの役割を担っていたことが推察されよう。

スパイイーの上申を受けた州総督は、イブン・ディップ・アル＝ヒーシュ邸に一団を派遣し、同邸宅にあった財産や商品を全て没収し、それらを駱駝・騾馬・驢馬に乗せて運び出すとハーン・ハリリー市場 *Sūq Khān al-Khalīlī* にて売却した。また、イブン・ディップ・アル＝ヒーシュはブーラークにおいて精米業も営んでいたが、その米に加えて、スレイマン・パシャ商館（別名、油商館）の彼の保有倉庫にあった油や糖蜜も全て没収された。さらに、保有していた複数の船 (*marākib*) が没収のうえ売却され、ブルッルスに保有していた各種のナツメヤシの木々も州総督の従者たちの手で根扱ぎにされ、その地で売り払われた。こうして全財産を没収・換金された後、イブン・ディップ・アル＝ヒーシュはアルジェ州 *Bilād al-Jazā'ir* への追放を命じられた。「彼は鉄枷を付けた酷い状態で下城し、彼を嫌う者たちの一団が立って見つめていた」という<sup>(17)</sup>。

かくしてイブン・ディップ・アル＝ヒーシュはアルジェ州への追放の身となり、そこにしばらく留まり、後にアルジェ州総督に事情を説明して理解を得るに至った。アルジェ州総督は彼に2名のマムルークの付人を与え、優美な上衣を着せて厚遇した。解放されたイブン・ディップ・アル＝ヒーシュは帝都イスタンブルへ行き、そこで一人の宰相 (*wazīr*) に会ってエジプト州総督のアリー・パシャとの間の出来事について訴えた。その結果、彼が没収された全財産をエジプト州の国庫の財 (*māl al-khazīna al-'āmira*) から支出するよう命じるスルターン勅令 (*amr khankārī*) が作成された。そして、この勅令の遂行を促すため、彼のエジプト州行きの随伴者として宮廷門衛 (*qābjī min al-abwāb al-khankāriyya*) が派遣されることとなった。しかし、当時のエジプト州総督ハジ・イブラヒム・パシャは、勅令の実行を先延ばしにする態度をとった。イブン・ディップ・アル

(17) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 83r.

= ヒーシュは登城して要求を繰り返したが、結局、その実現をみずに無念の死を遂げることとなった<sup>(18)</sup>。ハジ・イブラヒム・パシャの在任期間は1604年の5月から9月までであり、このハワージャールの死去は同年のこととみられる。

さらにイブン・アジャミーによれば、イブン・ディップ・アル=ヒーシュには成人した後嗣がいた。彼の名は不明だが、アズハル・モスクで長年学業に励んだアーリムで、当初の所属法学派はシャーフィイー学派であったがハナフィイー学派へと鞍替えし、ルーム地方に移住してカーディーの職を求めた。そこに長期滞在の後、イエメン州のある町のカーディーとなり、カイロに一時帰還しながらも同職に留まり、解任後にはハッジ巡礼を果たしてメッカで死去したという。関連記事は、「そして彼らの家々は荒廃し、住居は売却されたのである」と同家のカイロにおける終焉をもって締め括られている<sup>(19)</sup>。

イブン・ディップ・アル=ヒーシュに関して、『マバーヒジュ』に斯くも詳細な情報が盛り込まれた理由は二つ考えられる。一つは、ブーラクがイブン・アジャミーの成育・居住地だったことであり、二つ目は「ブルッルスィー」のニスバ（由来名）をもつこのハワージャールとイブン・アジャミーが、いずれもナイルデルタ北部の海関ブルッルス族を族的な故郷としていたと推察される点である。イブン・アジャミーは居住地や故郷の地縁的な人的交流を通じて情報を集め、詳述を残し得たのではないだろうか。

②イブン・アースィー Ibn al-‘Āsī として知られるハワージャール・アブドゥラフマーン al-Khawājā ‘Abd al-Rahmān al-ma‘rūf bi-Ibn al-‘Āsī

③ハワージャール・アブドウルカウィー al-Khawājā ‘Abd al-Qawī

アースィー家のこの2人のハワージャールについて、『マバーヒジュ』は

(18) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 83. そこには、イブン・ディップ・アル=ヒーシュが宮廷門衛にある金額を支払っていたという伝聞情報も付記されている。

(19) *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 83v-84r.

前記のハンナーの研究では触れられていない側面を伝えている。すなわち、オスマン朝期にブーラクのランドマークとなったスイナン・バシャ・モスクの初代イマームに就任した、シャイフ・ブルッルスィー‘Abd al-Wahhāb al-Burullusīに関する説明の中で、イブン・アジャミーは、アースィー家のハージャー・アブドゥッラフマーンのスィナン・バシャへの執り成し (shafā’a) で彼が同職を得たとしている。シャイフ・ブルッルスィーはアブドゥッラフマーンが設立したマクタブの児童の教師 (mu’addib al-atfāl) も兼務していたが、アブドゥッラフマーンの死後にその甥 (ibn akhī-hi) のハージャー・アブドゥルカウィー‘Abd al-Qawīが同マクタブのワクフ管財人職を継承すると、程なくして彼との間で諍いが勃発し、結局職を二つとも解任されてしまったという<sup>20</sup>。この記事ではアブドゥルカウィーは、ハンナーが述べるような「子」ではなく、「甥」とされている。法廷台帳史料を用いての確認、そしてアースィー家の家系図の作成が必要であろう。そして特に注目すべきは、大規模モスクの重要職の任命について、港の有力商人アブドゥッラフマーンが建立者の州総督に執り成す力を備えていたという点である。

また、『マバーヒジュ』の別の箇所には、1016年第7月4日／1607年10月25日にハッジ巡礼中に死去したブーラクの資産家のアフマド親方 al-Mu’allim Aḥmad ibn al-Mu’allim Yūsuf に関する記事のなかに、

<sup>20</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 9v. 『マバーヒジュ』には次の2つの関連情報もある。

(1) ハージャーのアブドゥッラフマーンの墓はブーラクにあった (*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 52r.)。 (2) 989年／1581-1582年のある夜、アブドゥルカウィー邸に盗賊が押し入った。翌朝、アブドゥルカウィーは、ブーラクの巡査 (sāhib al-darak) のハサン al-Muqaddam Ḥasan が盗賊に加わっていたと州総督に訴え、結局、ハサンはスィナーニーヤの大商館の門で斬首刑に処された。イブン・アジャミーは、ハサンが酒に酔って道に倒れている人をその住居まで運ばせるような巡査で、「ブーラク住民にとって害が少なかった」と同情的に述べたうえで、アブドゥルカウィーはその後に殺害されたが、それについては当該年の箇所ですりすしている (*Mabāhij al-ikhwān*, fol. 30v.)。だが、アブドゥルカウィー殺害の事件記事は本史料に見当たらない。

彼は、ブーラク Būlāq al-Qāhira の複数の商館 (wakā'il) と複数の集合住宅 (rubū') の持主である、イブン・アースィー・ブルッルスィー Ibn al-'Āsī al-Burullusī として知られるハワージャー・アブドゥッラフマーンの仲間 (aqrān) の一人であった<sup>21)</sup>。

とある。このアフマド親方は、籠を頭に乘せて鶏を売り歩く行商から成り上がって巨万の富を築いた、亜麻仁油と胡麻油の圧搾業者 (mudawlib bi-al-ma'āšir) であった<sup>22)</sup>。アースィー家のアブドゥッラフマーンを中心とした地元名士の人脈の一端を窺うことができよう。

## 2. ハーン・ハリリーーのハワージャー

カーヒラの目抜き通りカサバの中央東側に位置するハーン・ハリリーー Khān al-Khalīlī は、14世紀末にマムルーク朝有力アミールのジャハールカス・ハリリーーが建てた商館として始まり、王朝末期の1511年6-7月にガウリー（在位1501-1516）による全面的な取り壊しと新築でその相貌を変え、スルターンの大規模ワクフの物件となった<sup>23)</sup>。17・18世紀に、同商館はフィスキーヤ商館 Khān al-Fisqiyya、或いはアジャム商館 Khān al-'Ajam と呼ばれ、17世紀末から19世紀にかけては銅商館 Khān al-Nuḥās という呼称でも知られた<sup>24)</sup>。なお、史料に単にハーン・ハリリーーと記されるとき、この商館のみならず、ハーン・ハリリーー街区 Khuṭṭ Khān al-Khalīlī を指す場合もあることに注意すべきである。遺産管理台帳

(21) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 272v.

(22) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 272r. この記事には亜麻仁油の製造工程についての言及もみられる。

(23) 'Awāḍ al-Imām, "Awqāf al-Sulṭān al-Ghawrī", in Sylvie Denoix, Jean-Charles Depaule, et Michel Tuchscherer (ed.), *Le Khan al-Khalili et ses environs: Un centre commercial et artisanal au Caire du XIII<sup>e</sup> au XX<sup>e</sup> siècle*, 2 tomes, Le Caire: IFAO, 1999, t. 1, p. 32; t. 2, Pl. 9, n. 42; Pl. 11.

(24) Denoix et al. (ed.), *Le Khan al-Khalili et ses environs*, t. 2, pp. 36-38.

に基づく A・レイモンの研究によれば、同区は、カーヒラの五大商業区（ハーン・ハリリー、グーリーヤ／ハーン・ハムザーウィー、アズハル、ジャマーリーヤ、サーガ）のうち、17世紀末の段階で、そこで活動する商人たちの遺産総額で筆頭に位置していた<sup>25)</sup>。そこにはマムルーク朝期から多くのトルコ系商人、そしてある程度の数のイラン系商人がみられたが、オスマン朝期にはトルコ系の商人や職人の活動・居住地としての性格を深め、またイラン系商人もそこに数多く存在した<sup>26)</sup>。『マバーヒジュ続篇』にも、1018年第1月／1609年4月、ダシーシャ・ワクフに関わるスルターンの船の建材をカイロからスエズへと大量に運ぶ際に、ハーン・ハリリーの「ルーム商人たち (tujjār al-arwām)」が香辛料・ヘンナ運搬用のラクダの供出を命じられたことが記されている<sup>27)</sup>。

この地区で活動したハーワジャーとして、当該史料には次の2人が確認される。

④ハーン・ハリリーに倉庫を持つハーワジャー（1016年第4月／1607年7-8月歿）

このハーワジャーについては、『マバーヒジュ』にその名が記されていないが、かなり具体性に富む諸情報がある。彼はインド人 (Hindī al-aṣl) といわれていたが、そうではないとみる向きもあったという。ハーン・ハリリー Khān al-Khalīlī に倉庫 (hāṣil) を保持していたこのハーワジャーの遺産は、多量の香辛料 (bahār) とインドの織物 (aqmisha Hindiyya)、十分の一税の徴収のため彼に後れて船で来着した1万6,000ディーナール相当の香辛料及び織物、さらには20万ディーナールの現金から成っていた<sup>28)</sup>。後れて船で届いた商品に関するこうした言及からすると、紅海方面

<sup>25)</sup> Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 369-370. この試算によれば、同地区は18世紀後半にグーリーヤ／ハーン・ハムザーウィー、ジャマーリーヤに次ぐ第3位へと転落することになる。

<sup>26)</sup> Raymond, *Artisans et commerçants*, pp. 468-469, 482.

<sup>27)</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 39v.

での商用旅行からカイロに帰還した後、あまり時を経ずして死去したとみてよいだろう。「ハーン・ハリリー」の倉庫については、ハーン・ハリリー／フィスキーヤ商館の倉庫がまず考えられるが、ハーン・ハリリー街区に所在する別の商館、すなわちヘンナ商館 Khān al-Hinnā', 絨毯商館 Khān al-Busuf, コーヒー商館 Khān al-Qahwa, 給水所商館 Khān al-Sabil の地階にある倉庫を指す蓋然性も無いとはいえない<sup>(28)</sup>。また、当時のインド商人ならばペルシア語を話したかみしれず、前記のようにイラン系商人が多く活動していた同地区での商売を円滑に進め得たとの推測も生じる。当時、アラビア語だけでなくトルコ語やペルシア語も飛び交っていたこの地区ならではの人物例ともいえよう。

『マバーヒジュ』によれば、斯くも大きな資産を有しながら、彼の生前の衣服は白い外衣 (mallūta baydā') と厚い下着であり、毎日の個人消費がパン以外に3ニスフ(銀貨3枚)のみという切り詰めた生活を送っていた。また、メッカの聖域逗留者 (mujāwir) であった頃の彼を知る人からイブン・アジャミーが得た情報では、彼は一名の家内奴隷 ('abd) を保有し、28ディーナールで購入した女奴隷 (jāriya) を伴侶とし、「アッラーが彼に課した定めめの喜捨 (zakāt) を支払わず、自発的喜捨 (ṣadaqat al-tatawwu') もしなかった」という<sup>(29)</sup>。紅海・インド洋交易で財産形成に成功したこの外来系ハワージャーに対しては、その巨富を慈善的に施すことの一切無い、吝嗇で篤志に欠ける人物との評があったのである。自身の死後の救済、天国行きを希求し、救貧に力を注ぐというムスリムの富商の一般的傾向からすれば、異色の存在といえるかもしれない。

さらにイブン・アジャミーによれば、このハワージャーには前述の女奴隷との間に生まれた幼い男子が残されたが、「相続財産管理局の名のもと

(28) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 291r.

(29) 以上4つの商館の位置については、Denoix et al. (ed.), *Le Khan al-Khalili et ses environs*, t. 2, Pl. 9, n. 43, n. 45, n. 38, n. 37を参照のこと。

(30) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 291.

に (‘alā ism bayt al-māl)」エジプト州総督がその遺産を奪取してしまい、遺児には何も残されなかったという<sup>31)</sup>。こうした収奪は⑥のマグリブ系ハージャーにおいても確認されるため、この問題については併せて当該箇所を検討することにした。

#### ⑤ アアジャミーのハージャー

『マバーヒジュ続篇』によれば、1019年第2月／1610年4-5月、「ハーン・ハリリーにあるアアジャミーのハージャーのある人物 (shakḥ khawājā a‘jamī) に属する店舗」が盗難に遭い、このハージャーは4000ディーナールの金貨を失ったと主張した。そこで警察長官 (ṣāhib al-shurṭa) がこの店舗を調査し、ハーン・ハリリーとそこにあった商館 (wakā’il) の4人の門番を捕えた。警察長官は彼らを鞭打ち刑に処し、罰金を取ったが、盗まれた金貨の行方は結局分からなかった<sup>32)</sup>。

このハージャーの氏名や生歿年は残念ながら不明だが、アアジャミー (アジャミー) は非アラブ人、なかでもイラン人を指す語であった。また、盗難に際してまず門番を絞り上げるという捜査手法が現代と同様に近世のカイロでも採られていた点にも注目したい。

以上、ハーン・ハリリーの2人のハージャーは、このカーヒラ中心部の枢要な商業空間が帯びていた「東方的性格」を体現する商人たちであったといえよう。

### 3. イブン・トゥールーン地区のハージャー

9世紀後半建立のイブン・トゥールーン集会モスクを中心とした、カイロ南部イブン・トゥールーン地区には、中世からヒジャーズ巡礼などを契機にマグリブ人たち (maghāriba) が集住した。オスマン朝期カイロのマグリブ人の商業活動ではトゥールーン市場が筆頭に位置し、種々のマグリ

<sup>31)</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 291v.

<sup>32)</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fols. 80v-81r.

ブ製品の取引の場として機能していた。同市場のマグリブ人タージルたちは単一の強固な商人組合 (qā'ifat al-tujjār bi-sūq Tūlūn) を成し、「アフリマ (ahrima)」という毛布のカイロでの販売を独占し、組合の長たち (shuyūkh) と代理人たち (wukalā') は同王朝期を通じ発言力を持ち続けた<sup>33)</sup>。そして、同地区の大規模な商館はどれもマグリブ系商人によって建てられた<sup>34)</sup>。イブン・トゥールーン地区のマグリブ人コミュニティではチュニス・スファックス・ジェルバ島などのチュニス州系 (約4割) とトリポリ・ミスラタなどの西トリポリ州系 (約2割) が優勢で、共にオリーブ油交易で重要な役割を担った<sup>35)</sup>。なお、1712年頃からモロッコ、特にフェズ系マグリブ人のカイロへの流入・定着数が急増し、シャラーイビー家のようなフェズ系商人名家が次々と台頭した。彼らはカーヒラのゲーリーヤ街区やファッハーミーン街区に拠点を置き、それに引き寄せられるようにイブン・トゥールーン地区からチュニス州系商人がそちらへ移住する動きもみられた<sup>36)</sup>。

このイブン・トゥールーン地区を拠点に活動したひとりのハワージャールについて、『マバーヒジュ』には次のような独自の伝聞情報が書き留められている。

33) 'Abd al-Rahīm 'Abd al-Rahmān 'Abd al-Rahīm, *Al-Maghārība fī Miṣr fī al-'aṣr al-'Uthmānī (1517-1798): Dirāsa fī ta'thīr al-jāliya al-Maghribiyya min khilāl wathā'iq al-mahākīm al-shar'iyya al-Miṣriyya*, Tunis: Idārat al-Majalla al-Ta'rikhiyya al-Maghribiyya, 1982, p. 65; Raymond, *Artisans et commerçants*, p. 507; 'Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 265-266, 320-321.

34) 'Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 359, 370. 同地区からカイロ城にかけての市域 (通称サリーバ地区) の開発にもマグリブ人が大いに貢献した ('Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, p. 369.)

35) 'Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 31-32, 46-47, 56-57.

36) 'Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 32-33, 85, 321. シャラーイビー家については、'Abd al-Mu'ī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 91-99及び拙稿「シャラーイビー家に関するノート」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』27号 (1995年), 225-239頁を参照されたい。

⑥ハワージャー・サイド・マグリビー al-Khawājā Sa‘īd al-Maghribī(1016  
年 第8月18日 / 1607年12月8日歿)

このマグリブ系商人についてイブン・アジャミーは、「彼はカーヒラにおける大資産家であり、彼以上に多くの財産を有する者はマグリブ人たちの中に (fi jins al-Maghāriba) いなかった」と述べ、その遺産が香辛料 (bahār) や織物 (aqmisha) といった商品を除外して金貨10万ディーナール、或いは20万ディーナールであると人々が語っていたと記している。しかし、その生前の暮らしはどこまでも質素であり (mutawādi‘ ilā al-ghāya), 服装も儉約を極めていたという<sup>37)</sup>。マグリブ人ハワージャーのサイドは、香辛料と織物の交易で巨富を築いたように見受けられる。

サイドの死後、相続財産管理局の徴税請負人 (multazim bayt al-māl) が遺産を押収し、サイドの弟 (または兄) と妻の相続を妨げ、問題化した。このムルタズィムの個人名は『マバーヒジュ』に記されていない。弟 (兄) は当件についてエジプト州のカーディー・アスカル (qāḍī al-‘askar bi-Miṣr) のアブドゥルジャッバル・エフェンディ Shaykh al-Islām ‘Abd al-Jabbār Afandī に訴願を行なったが、カーディー・アスカルは手ずからこの件を扱わず、エジプト州総督ハサン・パシャの裁定を仰ぐという対応をとった。だが、州総督も取り合わず、弟 (兄) によるカーディー・アスカルへの請求が繰り返される事態となった。そして結局、前記の徴税請負人へのカーディー・アスカルの執り成しで両名は遺産を得ることができたという。多額の財産を遺したタージルたちに対する「メッカの統治者のシャリーフたちの遣り方で (‘alā ṭarīqat al-ashrāf ḥukkām Makka)」、このような収奪がエジプトでも起こるようになったとイブン・アジャミーは嘆息している<sup>38)</sup>。④のハワージャーの事例と同様に、ここでもエジプト州の相続財産管理局が有力商人の遺産の没収に関与していた。そして、④の場合の指摘のようにエジプト州総督が同局を通じ遺産を横領

<sup>37)</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 229v-230v.

<sup>38)</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 230v.

していたとすれば—これについては、州総督個人による横領ではなく、エジプト州財政上の雑収入の増加となるので黙認していたということも考えられるが—、それを違法とする裁定を公式に下すことなく「執り成し」という手段での解決を選んだ、カーディー・アスカルの対応の意味も理解されよう。

結果的には横領を許さず、嘆願を続けた弟（兄）の粘り強い姿勢が奏功したことになるが、カイロのバープ・アーリー法廷を主宰するカーディー・アスカルとエジプト州総督の本件における対応は決して公正とはいえないものであった。そして、本件に関するイブン・アジャミーの批判的立場からの記述は、富商の遺産の州総督による押収という政治的不正の横行、そして遺族による相続の困難という当時の問題を別扱している点で貴重なものといえよう。

以上、ハワージャ・サイードに関する『マバーヒジュ』の情報をまとめ、考察を加えたが、アブドゥルムウティーのマグリブ人商家に関する重厚な専著にこのハワージャに当たる商人を探索すると、活動時期や交易品目、資産の大きさ、後述するようにイブン・トゥールーン地区を拠点としたという事実などから、アムガール家 Bayt Amghār が目を引く<sup>39)</sup>。アンダルスに起源をもつアムガール家は、1492年のグラナダ陥落後にジェルバ島に移住し、カースィム al-Khawājā Qāsim ibn Saʿīd ibn Amghār の代に同島を拠点にアレクサンドリア・ロゼッタとスファックスとを結ぶ交易に従事した。彼は子のサイード al-Khawājā Saʿīd ibn Qāsim ibn Saʿīd ibn Amghār とその弟のアブドゥッラフマーンをアレクサンドリアとロゼッタに送り込み、その後、香辛料交易に力を注ぎ同家の拠点をロゼッタ、さらにはカイロに移した<sup>40)</sup>。続いて、サイードがカイロ、アブドゥッラフマー

39) ‘Abd al-Muʿī, *Al-Āʿīla wa al-tharwa*, pp. 64-66, 144-145. 当該期同地区のその他の商人名家には、チュニス州系のジャルマーム家、トゥラーブ家、スルターン家、アブー・アーイド家がある。‘Abd al-Muʿī, *Al-Āʿīla wa al-tharwa*, pp. 59-60の商家の一覧を参照のこと。

ンがジェッダやメッカに拠点を置き、16世紀後半エジプトの香辛料交易で最も重要な商家へと成長した。サイドはカイロ・アレクサンドリア・ロゼッタのタージルたちに香辛料を供給し、多くの家内奴隷を活用して織物をヒジャーズに送り、また西アフリカのカノヤトンプクトウから砂金を入手した。この兄弟は同じ年（1588年）にカイロとジェッダで死去した<sup>(40)</sup>。このサイドは、死亡年からここで問題にしているハーワジャー・サイドに当て嵌まらないが、アブドゥルムウティーは、次の世代に関する法廷台帳史料の情報は少ないながら、同家の商売がイブン・トゥールーン地区、ブーラク地区、ロゼッタで手広く展開されたとみている<sup>(42)</sup>。サイドやアブドゥッラフマーン、そしてロゼッタを拠点とした彼らの兄弟のマスワードやアブドゥルアズィーズの子孫たちについては不明な点が多く、同家で好まれた「サイド」と名付けられたハーワジャーがいても決して不自然ではない。当該期のイブン・トゥールーン法廷台帳の精査は未だ不充分と見受けられるので、同定作業は今後の課題としたい。

さらに、『マバーヒジュ続篇』にもサイド・マグリビーに関わる興味深い記事がみられる。病を得たエジプト州総督のオキユズ・メフメト・パシヤ Muḥammad Bāshā Sāliḥdār（在任1607-1611）についての1019年3月／1610年5-6月の次のような記述である。

同月、メフメト・パシヤは、トゥールーン集会モスク市場 Sūq al-Jāmi' al-Tūlūnī のタージルたちの一人であったハーワジャー・サイド・マグリビーの子孫 (khalaf) に彼の病を診てもらおうべく使者を送った。というのも、彼（州総督）は、彼（サイドの子孫の男）が心

(40) 'Abd al-Mu'ī, *Al-Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 64-65. 因みに、オスマン朝期のエジプト州（カイロ、アレクサンドリア、ロゼッタ、ナイルデルタ）にはイベリア半島を追われたモリスコも大量に流入・定着し、都市や村落の形成にも関与した。詳しくは 'Abd al-Mu'ī, *Al-Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 15-20を参照のこと。

(41) 'Abd al-Mu'ī, *Al-Ā'ila wa al-tharwa*, p. 65.

(42) 'Abd al-Mu'ī, *Al-Ā'ila wa al-tharwa*, p. 65.

霊術 (‘ilm al-rūḥānī) について知っていると信じていたからである。そこで彼 (サイドの子孫の男) は、彼 (州総督) のもとへと登城し、その状態を診て、魔術に掛かっているがそれを彼から除去すると告げた。しかし、これは根拠のない嘘であり、[サイドの子孫の男は] 至高なるアッラーに逆らう者である<sup>43</sup>。

子孫の男が心靈術に通じた人物として当時知られていたことが分かるが、ここでさらに重要なのは、サイド・マグリビーがイブシ・トゥールーン・モスクの常設市場、通称トゥールーン市場の商人だったことが確認される点である。

#### 4. その他のハワージャー

上記以外に、『マバーヒジュ』とその続篇の中に短い関連記述が確認されるカイロのハワージャーは、以下の6名である。

- ⑦アブー・ターキーヤとして知られるハワージャー・イスマーイール・ヒムスィー al-Khawājā al-mu‘tabar Ismā‘īl al-Ḥimṣī al-ma‘rūf bi-Abī Tāqiyya

このハワージャー・イスマーイールの経歴、商業経営、交易網、人脈と協業契約、拡大家族や世帯の構成、州の支配層との関係、州都の地区形成への寄与については、ハンナーの研究が細部を詳らかにしている。イスマーイールの祖父ヤフヤー (生没年不詳) はシリアの内陸都市ホムスのハワージャーで、父ハワージャー・アフマドは1580年代にイスマーイールを含む家族とカイロに移住し、エジプト・シリア間交易に従事し、織物交易の一大中心ゲーリーヤ街区に程近いワッラーキーン Sūq al-Warrāqīn の絹市場で活動した<sup>44</sup>。商人として育てられたイスマーイールは、この絹市場で

<sup>43</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 84r.

<sup>44</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 21–26.

絹商人のダミーリー ‘Abd al-Qādir al-Damīrī と出会い、両者の親密な交友は終生続いた<sup>(45)</sup>。イスマール兄弟の弟ヤースィーン（1632年歿）を伴い、商用を兼ねて巡礼の旅に出た父アフマドは、1596年にメッカで生涯を閉じたが、1590年代以降、イスマールの商業網の広がりはカイロを中心に、ジェッタ・モカなどの紅海諸都市からインドやセイロン、アレppoなどのシリア諸都市、イスタンブル・サロニカ・ヴェネツィアなど東地中海諸都市、さらには西アフリカのカノにまで達した<sup>(46)</sup>。

イスマールはワキール（代理人）をイスタンブル、モカ、カノなど各地に配し、ダミーリーなどカイロの商人たちと協業契約（‘aqd shirka）を頻繁に結び、資金調達とリスクの分散を図った<sup>(47)</sup>。イスラーム法廷を巧みに利用し、多角的な商業経営を成功させたイスマールの交易品目は多岐に亘ったが、特に重要だったのが当該期に交易量の急増したコーヒー豆、それに砂糖である。後者については、先物買い（salam sharfī）や融資（qard）を通じミヌーフイーヤ県などのナイルデルタ農村から砂糖黍を大量に確保し、カーヒラ中心部の本宅近くの櫛職人街区 Khutt al-Amshāyīn にカウワース工房 Maṭbakh al-Qawwās と呼ばれる製糖所を構え、生産・経営者としても手腕を発揮し、紅海圏、シリア、オスマン帝国中心地域、ヴェネツィアなどに砂糖を輸出して巨利を得た<sup>(48)</sup>。彼は1613年にカイロの商人の長であるシャーバンダル（shāhbandar al-tujjār）に上り詰め、短い中断を挟み1624年に死去するまでその地位を保った<sup>(49)</sup>。

イスマールは親友ダミーリーと共同で商業拠点として、カーヒラ北部のマンスリー病院裏道街区 Khutt Sirr al-Māristān に大小二つのウィカーラを新設した。その持分はイスマールが4分の3、ダミーリーが4分の1であった。この商業施設の出現は住宅地だったこの境界の商業地

(45) Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 32-34.

(46) Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 30-31, 34-36.

(47) Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 53-65.

(48) Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 70-94.

(49) Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 36-39.

化の先駆けとなった<sup>50</sup>。それらは、ファーティマ朝期建立のアクマル・モスクの向かいの、シャブラーウィー横丁 Darb al-Shabrāwī にあったイスマール・ハンマームを備えた本宅のやや南に位置した。イスマールはそのほかに、本宅の少し北に位置する、フトゥーフ門に程近いアミール・ジュユースシュ市場 Sūq Amīr Juyūsh 外れの製粉所横丁 Darb al-Ṭāḥūn の別邸、さらにはカイロ西部市域のエズバキーヤ池の北東畔に別荘まで保有していた<sup>51</sup>。

イスマールの世帯は、4人の妻、11人の子、1人のコプトの書記、複数の自由身分の従者 (tābi‘), 9人のアフリカ系男性奴隷、多数の女奴隷などから成っていた。第一夫人はホムス系商家のアリーカート家出身のバドゥラ、第二夫人は父方の従妹ルミア、第三夫人はカイロのハワージャー・アブー・バクル・アハイマールの娘アティーヤトウツラフマーン、第四夫人はグルジア人解放奴隷のハナーであった<sup>52</sup>。唯一の男子のザカリーヤは、イスマールの歿時に未成年であった。後事を託されたアリーカート家出身の娘婿アフマドは遺族の信用を失い、結局、製粉所横丁の別邸に居を定めた第三夫人アティーヤトウツラフマーン、彼女の生んだ後嗣ザカリーヤ、そして彼女の有能な娘でイラン系商人やエジプト州高官を夫としたウンム・アル＝ハナーが同家で主導的な役割を担うこととなった<sup>53</sup>。

<sup>50</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 127-131. カイロのバープ・アーリー大法廷の台帳に基づくハンナーの別の論文によれば、1608年に両者の間で合意文書が作成され、1619年までに竣工に至った。また、イスマールは弟ヤースィーンと共同で大ウィカーラにサビール・クッターブを附設し、大ウィカーラの中庭にモスク (masjid), 外側にコーヒーハウス (bayt qahwa) も設けた (Nillī Ḥannā, “Shāri‘ Khān Abī Ṭāqīyya”, in Denoix et al. (ed.), *Le Khan al-Khalili et ses environs*, t. 1, p. 168; Id., *Making Big Money in 1600*, pp. 81, 181n.). 両ウィカーラの正確な位置は、Denoix et al. (ed.), *Le Khan al-Khalili et ses environs*, t. 2, Pl. 9, n. 77に示されている。

<sup>51</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 132-136.

<sup>52</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 141-156.

<sup>53</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, pp. 161-164.

以上の要約からも、商人研究における法廷台帳史料の有用性は明白であろう。そして、ハンナーはこうしたカイロの目ぼしい商人たちについても同時代エジプトのアラビア語史書・年代記は沈黙し、言及が無いとしている<sup>54</sup>。その点で『マバーヒジュ』とその続篇は異色の叙述史料であり、このイスマールに関する点でも、『マバーヒジュ続篇』に貴重な記述がみられる。以下、その内容をまとめたい。

イブン・アジャミーによれば、イスマールが「優美な二つのウィカーラ」の建設を開始したのは1018年／1609-10年のことであった。両商館には倉庫群 (hawāsil) と複数階 (ṭibāq), 集合住宅 (rab‘) と店舗群 (ḥawānīt) が備わっていた。彼はまたそこに、1階が貯水所 (ṣiḥrij), 2階が孤児 (aytām) の初等学校 (maktab) の構造物も新設し、初等学校には教師 (mu‘addib) と助手 (‘arīf) が一名ずつ置かれ、月給が支払われた。また、それに接して「有名な常設市場 (sūq mashhūr)」も附設されたとしている<sup>55</sup>。このスークに関してはハンナーの研究に言及がなく、独自情報である。そして両商館には香辛料と各種の織物が運び込まれ、それらの計量人には前記の常設市場の一店舗が用意されたという。織物の種類は、ギザ県のエンバーバ郷 Nāhiyat Imbāba などから運び込まれる「カイスィヤート Qaysiyāt」と呼ばれた布、ルームの織物、この常設市場で売られる亜麻布 (qumāsh khām) であった<sup>56</sup>。

また、その建設地は長らく多量の塵芥が放置された荒廃物件の場所であったが、マンスーリー病院のワクフ物件とされた上記の両商館が新設されると、界限は安住の地となり、ユダヤ教徒も多く居住するようになったと述べられている<sup>57</sup>。

<sup>54</sup> Hanna, *Making Big Money in 1600*, p. 121.

<sup>55</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 59v. このイスマールの建造物 (‘imāra) に位置に関する言及は、*Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 45r にもみられる。

<sup>56</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 59v.

<sup>57</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fols. 59v-60r. 史料中には「病院 (bīmāristān)」と記されているが、立地などを考慮すれば、中近世カイロの「中央病院」であっ

また、『マバーヒジュ』の1016年第2月／1607年5-6月の記事には、「フザーバ al-Ḥuzāba」の呼称で知られたカイロの5名から成る穀物・農産物商人集団においてその長 (ra'īs) であったイブン・ハマード・ブルッルスィー Ṭu'ayma ibn Ḥamād al-Burullusī が、ハワージャー・イスマールからの借金を返済できずに長期間投獄され、後に釈放されたことが述べられている<sup>58</sup>。イスマールの融資活動の一端を窺わせる事例であり、これも本史料の独自情報である。

⑧ハワージャー・イブン・アフマル al-Khawājā Ibn al-Aḥmar

このハワージャー本人に関する詳しい情報は得られないが、『マバーヒジュ続篇』にはその邸宅 (bayt) での出来事についての短い記述がある。それによると、イブン・アフマル邸で家内奴隷の男 ('abd) が女主人 (sayyida) を殺害する事件が起こり、1018年第9月／1609年11-12月にこの奴隷が捕えられ、駱駝に乗せ市内引き回しのうえ処刑された<sup>59</sup>。富商の家内トラブルといえるが、残念ながら事件の背景は不明であり、邸宅の位置情報も示されていない。

⑨ハワージャー・イブン・アビー・スィブグ al-Khawājā Ibn Abī Ṣibgh

『マバーヒジュ続篇』によれば、1018年第11月12日／1610年2月6日、このハワージャーの男奴隷がカーヒラ中心部のサーガ (金銀宝石商街) に盗難目的で侵入し、これに気付いた門番 (bawwāb) をナイフで殺害した。巡査 (ṣāhib al-darak) がこの犯人を捕え、カイロ警察長官 (ṣāhib al-shurṭa) による尋問の末に奴隷の主人のイブン・アビー・スィブグも逮捕された。彼は200ディーナール乃至は300ディーナールの罰金 (jarīma) を

---

たカラーウーンのマンスーリー病院とみてよかろう。また、両商館が同病院のワクフ物件とされたことが確認される点も重要である。

<sup>58</sup> *Mabāhij al-ikhwān*, fols. 235v-236v.

<sup>59</sup> *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 63v.

支払って釈放されたが、翌日、男奴隷はサーガの門において吊るし刑に処された<sup>60</sup>。イブン・アビー・スイブグは家内奴隷の主人としての管理責任を問われたことになるが、ハウスホールド内の奴隷の処遇に問題があったとも推理される事件である。

以上の⑧、⑨の事件情報は、断片的とはいえ、ハージャーの家における奴隷の位相についての思考を喚起する具体性を備えている。

⑩カーヒラのシャーバンドル・アッ＝トゥッジャールのハージャー・アブドゥルムニム・ブサーティー al-Khawājā ‘Abd al-Mun‘im al-Busāṭī Shābandar al-Tujjār bi-al-Qāhira

1019年第3月／1610年5-6月にイブン・アジャミーの得た情報では、ハージャー・アブドゥルムニムが、アレクサンドリア港に彼に負債のある使用人がいたためにそこへ行って権利を主張したが、拒否され、両者ともにエフェンディ、つまりアレクサンドリアのパーブ法廷の首席法官に訴え出るという事態になった。そして当該の使用人はアブドゥルムニムが州総督メフメト・パシヤの死を喧伝していると述べ、そのことが証書(hujja)と報告書(mahḍar)に書かれ、それらがカイロへと送付された。アブドゥルムニムがカイロに戻ると、この訴訟についての情報を得たオキュズ・メフメト・パシヤが彼を呼び出し、カイロからの所払いを命じた。イブン・アジャミーは追放先について知らない<sup>61</sup>と記している。かくして、このカイロの遠隔地交易のリーダーは、借金をめぐる地中海港での法廷闘争の果てに追放の憂き目にあったのである。

一族の故郷がナイルデルタ北東部のダカフリーヤ県ブサート村であったと推測されるこのシャーバンドルに関しては、当該期カイロの商人世界に光を当てたハンナーの専論を含め先行研究に言及がない。これも法廷台帳史料の活用による実態把握へと歩を進めるべきであろう。

(60) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 66r.

(61) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 84.

## ⑪ ハワージャール・ヤフヤー・ザルカーニー al-Khawājā Yahyā al-Zarqānī

『マバーヒジュ』で言及されているのは、このハワージャール・ザルカーニーが当該期に富裕層の邸宅建設によって都市化が進展した「カフル・アル＝アズバキヤ Kafr al-Azbakiyya」に大邸宅 (bayt ‘aẓīm) を所有し、その隣には州総督府で書記を務めるシャリーフの大邸宅があったという内容である<sup>62)</sup>。エズベキヤ池周辺の地区はオスマン朝期に州の有力軍人や高官、富商、宗教エリートの邸宅が建ち並ぶ高級住宅地へと変貌したが<sup>63)</sup>、このハワージャールがその一角に大邸宅を構えるに至った経緯や彼の商業活動の実態を伝える記事を本史料に見出すことはできない。

## ⑫ ハワージャール・アブドゥルアズィーズ・サッラーフ al-Khawājā ‘Abd al-‘Azīz al-Ṣarrāf

サッラーフ (両替業者) であり、おそらくは金融業にも携わっていたであろうこのハワージャールは、1017年第6月／1608年9-10月、小カラーフア al-Qarāfa al-Ṣuḡhrā のハルルービーの墓 Turbat al-Kharrubī の下方にあるダイラミー・モスク Masjid al-Daylamī の向かいに貯水所 (sihrīj) を再建するよう命じた。この場所の貯水所は老朽化していたが、ハバシュ池 Birkat al-Habash から揚水機 (sāqiya) で汲み上げ、水路で導かれた水がこの改良された貯水所へと達するようになった。イブン・アジャミーは、「これによって人々には慈愛 (rifq) がもたらされた。アッラーが彼に良きことをもって報奨されますように！」と高評価を与えている。さらに、このハワージャールは同年中に、近くの荒廃した別の貯水所も再建したという<sup>64)</sup>。本事例は、多数の聖廟がひしめくカラーフア墓地を舞台としたハワ

62) *Mabāhij al-ikhwān*, fol. 42v. 一般にカフルは「小村」・「枝村」を意味するので、この時期までエズベキヤ地区はカーヒラ西方の「エズベキヤ村」と認識されていたことになる。エズベキヤの都市化に関する具体的情報を多く含む当該部分については更なる検討が必要である。

63) Doris Behrens-Abouseif, *Azbakiyya and Its Environs from Azbak to Isma‘il, 1476-1879*, Cairo: IFAO, 1985, pp. 37-69.

ージャーの慈善活動の具体相を伝えている。

### おわりに

以上、未活用の叙述史料に記述されたカイロのハワージャーたちに着目し、論じてきた。個々人に関する情報量に多寡はあり、氏名不詳のハワージャーもいるが、まとめとして以下の諸点を指摘しておきたい。

まずハワージャーのエトノス（前近代民族）的側面については、限られた情報ゆえに確定はできないが、エジプト系（①、⑩）、マグリブ系（⑥）、シリア系（②？、③？、⑦）、非アラブ系（④、⑤）、不明（⑧、⑨、⑪、⑫）と一応の分類が可能であり、そこには多様性が明らかである。

交易品目については、紅海・インド洋産品であるコーヒーや香辛料（④、⑥、⑦）、インド産やその他の織物（④、⑥、⑦）に加え、エジプト産の米・糖蜜・油・穀物（①）が確認された。おそらくはナツメヤシの生産や販売にも関与していたとみられる①のブーラク商人イブン・ディップ・アル＝ヒーシュについては、農産物や農産加工品を中心としたその取り扱い品目が注目され、大きな地理的広がりも示したその個人史や家族史の解明は、⑦のイスマーイール・アブー・ターキーヤとは別のハワージャー類型を提供すると期待される。多量に残存する当該期のブーラク法廷台帳史料を用いた照射が必要であろう。

慈善事業については、孤児や児童の初等学校の設立・運営（②、③、⑦）、墓廟地区の貯水施設の再建（⑫）が確認された。しかし、巨富を築きつつも義務及び任意の喜捨を実践しなかったとされる人物例（④）もあり、吝嗇の目立つ富商にも「ハワージャー」の呼称が社会的に付与されていたという点は熟考を要する。

そして、ハワージャーは都市の有力な製造業者と協力関係を結ぶ一方で（②）、ウラマーや有力市民との対立や紛争が負の展開を招く場合（①、

(64) *Dhayl mabāhij al-ikhwān*, fol. 25r.

③) もあり、また盗難被害 (③, ⑤) や家内奴隷の犯罪 (⑧, ⑨) に苦慮する例も観察された。さらに、ハワージャーには州総督府による財産没収の危険があり (①), 相続人がいても相続財産管理局によって遺産を不当に奪取されることもあったのである (④, ⑥)。エジプト州相続財産管理局の活動実態は未解明であり、今後探究すべき課題といえよう。

総じてハワージャーの商業経営の内実について本叙述史料の語るところは残念ながら少ないといえるが、こうしたなか融資とその回収をめぐる事例 (⑦, ⑩, ⑫?) が特に注目される。マグリブ系商人に関するアブドゥルムーティーの検討がその萌芽的研究であるが<sup>65)</sup>、近世エジプトの「商人資本主義」の性格を考究するうえで肝要なこの問題の、法廷台帳を主要史料とした総合的研究が待たれるところである。

---

(65) 'Abd al-Mu'tī, *Al-'Ā'ila wa al-tharwa*, pp. 174-177.